

ジェンダーから見た高校国語教科書の実態

— 物語教材72編の分析を通して —

岩 田 あゆ実・岡 崎 渉

1. はじめに

学校教育の現場には、教師の言動や学校のルール、教科書など、児童生徒が規範性を形成する上で影響を与えるさまざまなものが存在している。中でも教科書は、学校や地域を問わず多くの児童生徒が共通して触れることになるという点で、その影響力は大きいだろう。従来、教科書の中に描かれるステレオタイプの男女像が、「隠れたカリキュラム」として、児童生徒のジェンダー・バイアスを助長させるという批判がなされてきた（武田，2003；小宮，2011；永田，2012；牛山，2014；河野・藤田，2018）。特に国語教科書の物語教材は、当時の文化や経済状況を反映しており（河野・藤田，2018：72），そこで描かれる「男らしさ」「女らしさ」という性役割や、言葉遣いに見られる性差は、子どもたちのジェンダー意識の形成に大きな影響を与える（牛山，2014：90）。そのため、主に国語教科書においてジェンダーがどう描かれているかが研究されるようになった。しかしながら、小学校、中学校に比べ、高校の国語教科書については十分に実態把握が行われていない。

そこで本研究では、高校国語教科書の物語教材において、ジェンダーがどう描かれているか、その実態を明らかにし、教科書が読み手である生徒にジェンダー・バイアスを生じさせるものとなっていないかどうか検討することを目的とする。

2. 問題の背景

2.1 「ジェンダー」とその広まり

「ジェンダー」とは社会的性別を意味する単語である。身体的性別を意味する「セックス」と区別するために、1960年代頃からストラーラによって使用され始め、1970年代以降、女性学の学者らによって広く採用されることで定着していった（上野，2006）。ジェンダーについてバトラー（1999：72）は、「身体をくりかえし様式化していくことでありきわめて厳密な規制的枠組みの中でくりかえされる一連の行為であって、その行為は、長い年月のあいだに凝固して、実態とか自然な存在とかいう見せかけを生み出していく」と述べている。つまり、「男らしさ」「女らしさ」は、身近な人や社会とかかわっていき、言説実践がなされることで構成されるという（河野・藤田，2018：16）。このような社会構築主義の観点から捉えられるようになったことで、ジェンダーは社会的、文化的につくられたものであると認識されるようになっていった。ジェンダーが人々によってつくられたものであれば、人々によって是正していくこともできるということになる。

20世紀に入って以降、先進国を中心に男女平等の機運が高まる中、1979年には国連総会で「女性差別撤廃条約」が採択された。日本もこれに1985年に批准し、同年に「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」、通称均等法を制定した。1999年には「男女共同参画社会基本法」が制定され、政府による「男女共同参画」政策が行われるようになった。「男女共同参画」の概念は、「男女共同参画社会基本法」第1章「総則」、第2条の1で、以下のように定義されている。

「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、ともに責任を担うべき社会を形成することをいう。」

この新しい「男女共同参画」により、女性に対する暴力の根絶や、ワーク・ライフ・バランスの実現、地域防災、起業支援など、幅広い取り組みが行われている。

教育分野におけるジェンダーは、1960年代に注目され始めた。1970年代には、アメリカにおいて公民権運動との関わりで起こった女性解放運動を指す「第二波フェミニズム」が盛んになり、その影響を受け、日本でも女性と教育の研究が行われるようになった（森，1992）。「男女共同参画」の施策が進むにつれ、教育において、男女間で「結果の不平等」が生じていることが問題視されるようになり、社会的・文化的につくられる性への教育の背景を探っていく必要性が主張された（天野，1988）。一連の研究で明らかにされた、明治・大正・昭和の女子教育の変遷を見ると、女子教育は「良妻賢母」を目指し、女らしさを受け入れることで、個人的な幸福に恵まれることが謳われており、ジェンダー意識の形成に教育が大きく関わっていることや（牛山，2014：95）、教科書で描かれる男女のステレオタイプが「隠れたカリキュラム」として機能していることが見出されてきた（河野，2018：60）。

2.2 教科書におけるジェンダー

教科書は、国や地域の教育課程を反映させ、学校のカリキュラムを具現化する媒体としての機能を担っている。もし、教科書に男女の性別に関するステレオタイプが描かれていた場合、「男らしさ」や「女らしさ」といった、「ある人が、その性別ゆえにとることを社会的に期待されるパターン」（加藤，2006：33）という性役割を、児童・生徒に学習させることになりかねない。ジェンダーに関する固定的な考えを植えつけてしまうことによって、「人々の性別に関するステレオタイプ、偏見」である「ジェンダー・バイアス」（牛山，2014：18）を助長してしまう恐れがある。

教科の中でも国語科の場合、教科書教材は言語が表現する内容面とは無関係に成立しえないため、教材の中にジェンダーの問題が含まれているならば、国語学習の目標とは無関係に「隠れたカリキュラム」が機能してしまうことになる（牛山，2014：101）。そこで、国語教科書に対するジェンダーの研究が行われるようになった。

小学校国語教科書については、牛山（2014）が、平成16年度使用の教科書72冊における物語教材156編を対象に、登場人物の性別における数的バランスと女性の描かれ方に偏りが見られるかどうかを調査した。その結果、156編中105編（67%）で男性が主要人物として描かれていることがわかった。女性の描かれ方についても、性別役割分業が描かれているもの「女性の問題解決能力を認めていないもの」「女らしさのイメージが教材のイメージとなっているもの」など、女性が主要人物である作品の25編中15編で、ジェンダー・バイアスを助長しかねない描写が含まれていたという。永田（2012）は、小学校国語教科書の教材473編を対象に、ジェンダーに関する「隠れたカリキュラム」について調査した結果、性別によって一人称や服装が固定化される傾向、および教科書中の文章が想定する学習者が、男性に限定される傾向のあることがわかった。

中学校国語教科書については、松元（2005）が1959年から2002年までの教科書54冊で描かれている男女像を調査した。その結果、教材の内容に性別によるステレオタイプが反映されており、「男らしさ」「女らしさ」のステレオタイプや、生まれつきの性別による性格・能力が描かれているという特徴が観察された。しかし、1993年の教科書からは変化も見られ、2002年には性別より個性が重視されるようになったという。なお、社会状況の変化を受け、中学校教科書は2021年度から、「性の多様性」について取り上げた教科および記述が大幅に増えている（日本経済新聞、2020）。

高校国語教科書については、武田（2003）が、当時の新設科目である2000年度の国語総合の教科書20冊を対象に、教材著者および教科書編集委員の男女比を調査している。その結果、女性著者が占める割合は、小説で22%、全ジャンルで19.2%と、いずれも旧科目である国語Ⅰより増えてはいたものの、非常に少ないことが明らかになった。さらに、教材選定を行う編集委員に占める女性の割合は、国語総合を制作した教科書会社10社の平均で12.9%であり、中には編集委員に女性がまったく含まれていない会社もあったという。教材の内容に対する研究については、小宮（2011）が、高校国語教科書における性愛をめぐる記述の有無やその内容を調査し、同性愛の記述は皆無だったとしている程度である。高校国語教科書の場合、小学校、中学校と違い、教科書内の教材でジェンダーがどう描かれているのか、ほとんど明らかになっていない。読み手のジェンダー・バイアスを助長し得る要素を明らかにするためには、ジェンダーから見た教科書の実態を総合的に記述する必要がある。加えて、人々のジェンダーに関する意識は近年急速に高まっているだけに、著者の男女比なども、武田が調査対象とした2000年度の教科書からは変わっている可能性が考えられる。

2.3 分析の観点

では、ジェンダーから見た国語教科書の実態を明らかにするには、どのようなところに注目すればよいだろうか。先行研究では、物語教材が対象とされる場合が多いが、これは国語教科書の中でも、登場人物や発話の描写にジェンダー上の特徴が反映されやすいためであろう。具体的には、著者および主要な登場人物の男女比、

登場人物が用いる人称表現、登場人物の描かれ方が分析の観点として挙げられる(牛山, 2014: 96; 河野, 2018: 59)。以下、それぞれの観点について述べる。

著者の男女比について、永田(2012)は、小学校国語教科書の教材473編の内、男性著者によるものが301編(63.6%)だったことを報告している。伊藤ら(1991)は、教科書におけるあらゆる次元の男女比は、数量的な問題が質の問題と深く関わると指摘している。著者の性別が男性に偏っていると、女性差別を伝える意図はなくても、教材を通して固定化された価値観を与えてしまうことにつながる(河野, 2018: 61)。したがって、教材に占める著者の男女比は、教科書がジェンダーに中立な立場をとっているかどうかを窺う一つの指標となる。

主要な登場人物の男女比について、牛山(2014)は、小学校国語教科書における物語教材について、男子が中心的に描かれ、物語の中心となって活躍する傾向があるとしている。このような傾向は、物事は男子が中心になって行うものであり、女子は周延的な存在であるといった、ステレオタイプの価値観を植えつけることにつながる。

登場人物が用いる人称表現は、男女間で差異があるならば、用いるべき人称表現は性別により規定されるとする認識を強化するものになる。金水(2003)は人称表現を、話し手や聞き手のステレオタイプを示す重要な指標の1つとして挙げている。例えば一人称の場合、「おれ」が力強く、荒っぽい人物を表現できるのに対し、「ぼく」は弱々しい、大人しい人物を表現できるといったものである。一人称は代名詞だけでなく、「真知子は、アイスクリームが食べたい」のように、自分の名前が用いられる場合もある。これは、子ども、または子どもっぽい若い女性を想像させるステレオタイプとして認識される(金水, 2003)。二人称も一人称と同様に豊富な種類をもつが、表現によって話し手、聞き手のステレオタイプを表す指標となる。人称表現は、「男性語」「女性語」の区別があるとされる表現の一種だが、このような区別は人々の言説実践以前に存在しているのではなく、人々が言説実践の中で絶え間なく構築するものとして捉えることができる(宮崎, 2016)。よって、人称代名詞の種類や使用頻度を見ることで、教材が男女による人称表現のステレオタイプを形成する要因となっていないかどうかを検討することができる。

登場人物の描かれ方は、「男らしさ」「女らしさ」や、男/女がなすべきこと、なすべきでないことといった、「性役割」に関する読み手のステレオタイプを形成する要因となり得る。牛山(2014)は、小学校国語教科書において、主要な登場人物が女性である物語教材25編中、性役割の点でステレオタイプを打破するような女性として描かれているのは10編であったとされている。ただし、その10編の内、性別を超えて個性的で生き生きとした女性像が描かれていた5編はすべて外国の作品であり、日本の作品における女性は、人物像としてやや類型化したものだったという。

このように、ジェンダーから見た教科書の実態を明らかにする上では、物語教材における著者および主要な登場人物の男女比、登場人物が用いる人称表現、登場人物の描かれ方が有効な観点になると考えられる。

2.4 研究課題

前節までの検討を踏まえて本研究では、高校国語教科書でジェンダーがどのように描かれているのか、ジェンダー上の特徴が反映されやすい物語教材を対象とし、以下四点の研究課題に答えることにより、その実態を明らかにする。

- (1) 著者の男女比に偏りはあるか
- (2) 主要な登場人物の男女比に偏りはあるか
- (3) 登場人物の人称表現に性差は見られるか
- (4) 登場人物の描かれ方に性役割は見られるか

これらの結果をふまえ、高校国語教科書に、読み手のジェンダー・バイアスを助長する要素が見られるかどうかを検討する。

3. 方法

3.1 データ

データとする高校国語教科書は、2020（令和2）年度発行の大修館書店、第一学習社、東京書籍から出版されている「国語総合」「現代文 A」「現代文 B」の教科書、計21冊とした。全国の高校で用いられている教科書のシェアについてのデータは見当たらなかったものの、上記3社は、東京都の都立高校で2020年度に使用された、当該科目における教科書の出版社上位3位を占めていること（東京都教育委員会、2020）、静岡県や愛知県でもこの3社が当該科目における主な採択教科書となっていることから（静岡教科書株式会社、2020；愛知県教育委員会、2020）、全国的に多くの高校生が用いている教科書であろうと判断した。21冊の教科書からすべての物語教材を選定したところ、大修館書店が54編、第一学習社が56編、東京書籍が46編であった。教科書間で重複する教材は1編と数えた結果、対象となる教材は全部で72編であった。データに用いた教科書21冊および教材72編の一覧を、論文末の出典に記載する。

3.2 分析手順

研究課題1の分析では、72編の教材を対象に著者の男女比を調べた。

研究課題2の分析では、72編の教材を対象に、「Ⅰ 主要な登場人物が男性の教材」「Ⅱ 主要な登場人物が女性の教材」「Ⅲ 主要な登場人物の性別が不鮮明、あるいは性別のない教材」のいずれかに分類した。ここでの主要な登場人物とは物語教材の主人公のことを指す。

研究課題3の分析では、文語体を用いて書かれている『舞姫』を除外した71編を対象に、すべての登場人物が用いている一人称・二人称の種類と使用回数を男女別に調べた。その際、一人称・二人称を表す名詞は代名詞だけでなく話し手、あるいは聞き手の名前も含めた。

研究課題4の分析では、72編の教材を対象に、登場するすべての人物について、性役割の意識に影響を与える描写がなされているかどうかを、牛山（2014）の4ゲ

グループを用いることで調べた。4グループとは、「A 性別役割分業が描かれている描写」「B 女性の問題解決能力を認めていない描写」「C『女らしさ』のイメージである描写」「D ジェンダーを超える女性が描かれている描写」である。牛山はこの4グループのうち、Aグループには、「母親と育児」「女子と料理」「産後の看護と育児」のような女性と家事を結び付けるような描写や、「女性と機織り」「女性と和裁」のように仕事と性別を結び付ける描写を分類している。Bグループには、「男子による問題解決」のような問題解決のきっかけが男性によるものであったり、または相手や変化をそのまま認めて受け入れず、自己中心的にとらえたりする描写を分類している。Cグループには、「女の子の優しい世界」「女の子ゆえのいじらしさ」「女性の恋」のように、女性のステレオタイプによって物語の雰囲気を作られている描写を分類している。Dグループには、女性のステレオタイプから逸脱した女性像として、「逸脱する女性像」「行動する女性像」「人間愛を示す女性像」「異質性を受け止める女性像」「友情を育む女性像」「冒険する女性像」「仕事をする女性像」といった、社会的目的をもって行動したり、異性間の友情を育んだり、収入を求めて働いたりする、たくましい女性の描写を分類している。A, B, Cグループは性別役割のステレオタイプを描いたものであり、Dグループはそのようなステレオタイプを打破する女性像を描いたものである。

4. 結果

4.1 著者の男女比

研究課題1について、72編の教材を調べた結果、著者が男性である教材は45編(62.5%)、女性である教材は27編(37.5%)であった。男性著者のほうが多いという結果は、小学校国語教科書を見た永田(2012)、高校国語教科書を見た武田(2003)の調査結果と同様であったが、武田が調査対象とした2000年度の国語総合における女性著者の割合22%(小説は19.2%)よりも増えている。

また、著者の男女比は教材となった作品が執筆された年代によっても異なると考えられたため、作品の年代別に著者の性別を調べた。その結果、1800年代の『舞姫』『たけくらべ』はそれぞれ男性、女性であり、1900年から1976年までの25編は、すべて男性であった。女性著者は1977年以降に執筆された作品に集中しており、2014年までの45編の内、男性著者は19編、女性著者は26編であった。物語教材全体而言えば、男性著者のほうが多いものの、1977年以降に執筆されたものに限れば、女性著者のほうが多いことがわかった。

4.2 主要な登場人物の男女比

研究課題2について、72編の教材を調べた結果、「Ⅰ 主要な登場人物が男性である教材」(以下、Ⅰ類)は40編(55.6%)、「Ⅱ 主要な登場人物が女性である教材」(以下、Ⅱ類)は26編(36.1%)、「Ⅲ 主要な登場人物の性別が不鮮明あるいは性別のない教材」(以下、Ⅲ類)は6編(8.3%)と、取り上げた教材の過半数をⅠ類が占めた。なお、『山椒魚』『よだかの星』は主要な登場人物が動物ではあるが、オスとして描かれていたため、Ⅰ類に分類した。牛山(2014)による小学校国語教科書の分析で

は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類がそれぞれ105編（67%）、28編（18%）、23編（15%）であり、主要な登場人物は男性である教材がもっとも多い点は同様であったが、高校国語教科書の方が、女性の占める割合が高かった。

主要な登場人物の男女比は、著者の男女比と関連があるのかどうかを調べたところ、Ⅰ類の教材は40編中37編（92.5%）が男性著者、Ⅱ類の教材は26編中20編（76.9%）が女性著者であり、いずれも主要な登場人物は著者と同性である場合が多かった。特に、主要な登場人物が男性である教材のうち、女性著者によるものは3編（7.5%）のみだった。

主要な登場人物は性別によって年齢層が異なるのかどうかを調べたところ、社会人として働いている大人が主要な登場人物である教材は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類すべてのグループで半数以上を占め、子どもや生徒など、高校生に年齢の近い人物である教材は、Ⅰ類が40編中8編（20%）、Ⅱ類が26編中9編（35%）と、主要な登場人物が女性である教材のほうが、子どもや生徒を描いた教材が多かった。

4.3 登場人物の人称表現

研究課題3について、「舞姫」を除く71編の教材から、一人称・二人称の使用回数を調べたところ、一人称は男が1,576回、女が1,211回、二人称は男が266回、女が117回であった。男女それぞれにおける、一人称・二人称の表現別使用回数を表1、2に示す。

一人称について、男性は「わたし（私）」「ぼく（僕）」「おれ（俺）」の3種類で95.2%を占めており、少数ではあるが「わし」「うち」「わたくし」などの使用も見られた。女性は「わたし（私）」「あたし」の2種類で97.6%を占めており、少数ではあるが「うち」などの使用も見られた。二人称について、男性は「あなた」「あんた」「きみ」「おまえ（お前）」「(名前)」と、5種類の使用がいずれも多く見られたが、女性はほぼ「あなた」「あんた」「(名前)」の3種類であり、特に「あなた」だけで約半数を占めていた。

以上のように、主に用いられている呼称として、男性は一人称が3種類、二人称が5種類だったのに対し、女性は一人称が2種類、二人称が1種類であり、一定の割合で使われる呼称の種類は、一人称、二人称共に、女性の方が少なかった。

表1 一人称の男女別使用回数

	男	女
わたし（私）	991 (62.9%)	1028 (84.9%)
ぼく（僕）	326 (20.7%)	0 (0%)
おれ（俺）	184 (11.7%)	0 (0%)
わし	30 (1.9%)	3 (0.2%)
あたし	1 (0.1%)	154 (12.7%)
あたくし	0 (0%)	3 (0.2%)
うち	8 (0.5%)	19 (1.6%)
わたくし	36 (2.3%)	1 (0.1%)
(名前)	0 (0%)	3 (0.2%)
合計	1,576	1,211

表2 二人称の男女別使用回数

	男	女
あなた	48 (18.1%)	61 (52.1%)
あんた	52 (19.5%)	19 (16.2%)
きみ（君）	43 (16.2%)	2 (1.7%)
おまえ	58 (21.8%)	3 (2.6%)
(名前)	65 (24.4%)	32 (27.4%)
合計	266	117

4.4 登場人物の性役割

研究課題4について、72編の教材におけるすべての登場人物を対象に、その描かれ方に性役割が見られるかどうか、牛山（2014）の4グループに基づき調べたところ、A, B, C, Dにそれぞれ、13編、1編、11編、10編が該当した。

「A 性別役割分業が描かれている描写」は72編中、13編に見られた。結果を表3に示す。中には、『幼なじみたち』の神父や『鼻』の坊主、あるいは『伊豆の踊り子』や『舞姫』の踊り子、『待合室』と『沖縄の手記から』の看護婦、といった、当時は一方の性の者しかつくことのできなかった職業も含まれる。だが、『待合室』の医者（男性）や、『子供たちの晩餐』『ほねとたね』の料理をする者、『いろはに、こんぺいとう』の介護をする者（以上、女性）といった、性別を問わないはずの仕事に特定の性別が描かれるというステレオタイプの描写も見られた。

表3 性別役割分業が描かれている描写

	教材名	役割
男性	沖縄の手記から（田宮虎彦）	男性と軍医長
	幼なじみたち（遠藤周作）	男性と神父
	山月記（中村敦）	男性と役人
	卒業（魚住直子）	男性と消防員
	タオル（重松清）	男性と漁師
	島の少年一船（内海隆一郎）	男性と漁師
	待合室（内海隆一郎）	男性と医者
鼻（芥川龍之介）	男性と坊主	
女性	伊豆の踊り子（川端康成）	女性と踊り子
	いろはに、こんぺいとう（原田マハ）	母親の介護をする女性
	沖縄の手記から（田宮虎彦）	女性と看護婦
	待合室（内海隆一郎）	女性と看護婦
	子供たちの晩餐（江國香織）	母親と料理
	舞姫（森鷗外）	女性と踊り子
	ほねとたね（川上弘美）	女子と料理

「B 女性の問題解決能力を認めていない描写」については、『話を聞かせて』（山本文緒）に見られたのみであった。この教材は、問題解決を主人公である女性自身が行うのではなく、恋人である男性の介入によって行っている。

「C『女らしさ』がイメージである描写」は72編中11編に見られた。結果を表4に示す。『おぼろ月』『ドライ・クリーニング』『葉桜と魔笛』『ひよこの眼』『ほおずきの花束』『ほねとたね』『旅する本（石田由良）』は恋をする女の子が、『とんかつ』『バスに乗って』『水かまきり』では、子どもを心配する母親が描かれていた。これ

らの作品では、「優しく柔らかい」という「女らしさ」のステレオタイプが描かれていると言える。

表4 「女らしさ」がイメージである描写

教材名	役割
おぼろ月（藤沢周平）	親の決めた結婚に反抗し、かけおちした幼なじみにあこがれを持つ
コート（梨木果歩）	姉に対する妹の思い
ドライ・クリーニング（吉田修一）	恋の話をする女の子
葉桜と魔笛（太宰治）	恋にあこがれを持つ女の子
ひよこの眼（山田詠美）	女の子の恋
ほおずきの花束（鷺沢萌）	女の子の悩み
ほねとたね（川上弘美）	女の子の恋
旅する本（石田衣良）	失恋する女の子
とんかつ（三浦哲郎）	息子を思う母親
バスに乗って（重松清）	息子を心配する母親
水かまきり（川上弘美）	息子を心配する母親

「D ジェンダーを超える女性が描かれている描写」は10編に見られた。結果を表5に示す。Dグループには、男性の多い消防署で働く消防隊員の女性（『卒業』）や、旅に出て、自分自身の変化を自覚したり、今まで抱いていた疑念を解消したりする、自分の意思をもって実行に移す女性（『旅する本（角田光代）』『トランジット』）、互いに気遣い、認め合う女性同士（『真面目な二人』『ベル・エポック』）といった描写が見られた。牛山（2014）の調査では、小学校国語教科書の物語教材で、このDグループに該当する教材は約5%であったため、約14%にあたる10編に見られた高校国語教科書のほうが、ジェンダーを超える女性像に触れる機会が多くなっていると言える。表5を見るとわかるように、高校ではさまざまな職で活躍する女性が多く描かれており、より将来に向けての展望がもてるような内容が好まれるためと思われる。

このDグループに該当した10編の著者を見てみると、9編が女性著者によるものであることに気づく。著者が男性である物語教材は、全体の6割以上を占めているにも関わらず、女性のステレオタイプから逸脱した女性を描いているのは、ほぼ女性著者によるものであるということになる。また、Dグループの描写が見られた教科書を出版社別に見ると、第一学習社、東京書籍はそれぞれ4冊であったが、大修館書店は1冊に1編が所収されるのみであり、出版社によっても異なることがわかる。

表 5 ジェンダーを超える女性像が描かれている描写

教材名	役割
いろはに、こんべいとう（原田マハ）	仕事を持つ女性像（心療内科）
巨人の接待（小川洋子）	仕事を持つ女性像（翻訳家）
卒業（魚住直子）	仕事を持つ女性像（消防隊員）
旅する本（角田光代）	旅をする女性像
調律師のみ子さん（いしいしんじ）	仕事を持つ女性像（調律師）
トランジット（小川洋子）	旅をする女性像
話を聞かせて（山本文緒）	仕事を持つ女性像
ベル・エポック（絲山明子）	友情が見られる女性像
真面目な二人（川上弘美）	友情を育む女子像
みどりのゆび（吉本ばなな）	仕事を持つ女性像（バーテンダー）

5. 考察

前節までの結果をまとめつつ、ジェンダーから見た高校国語教科書について考察する。研究課題1では、著者の男女比に偏りがあるかどうかを検討した。その結果、著者の男女比は62.5%：37.5%と、小学校国語教科書と同じく男性著者のほうが多いことがわかった。一方で、女性著者の割合は、武田（2003）の見た2000年の「国語総合」よりも多く、さらに、1977年以降に執筆された教材に限れば女性著者のほうが多かった。かつては女性による作品自体が少なかったであろう時代背景を考えると、教科書に男性著者の教材が多くなること自体はやむを得ないが、それだけに、比較的最近の作品については、積極的に女性著者による作品を取り入れようとしている可能性が考えられる。

研究課題2では、主要な登場人物の性別に偏りがあるかどうかを検討した。その結果、主要な登場人物が男性である教材は55.6%と、36.1%であった女性より多いことがわかった。小学校に比べれば、女性が主要な登場人物である教材の割合は高かったが、それでも男女間の差は大きいと言え、男性が中心的に描かれる傾向があると言える。また、主要な登場人物は著者と同性である場合が多かった。女性著者の教材を増やすことは、女性が主要な登場人物である教材を増やすことにもなることがわかる。さらに、主要な登場人物が女性である教材は、男性である場合に比べ、人物が子どもや生徒である場合が多かった。これは、男性人物のほうがさまざまな年代、立場の人物が描かれているということでもあり、多様な女性像を示すためには、幅広い年代、立場の女性が描かれることが望まれる。

研究課題3では、登場人物の人称表現に性差が見られるかどうかを検討した。その結果、一定の割合で使われる呼称の種類は、一人称でも二人称でも、女性の方が少なかった。使われる種類だけを見れば、女性も男性同様に多様な人称表現を用いているが、ごく少数しか使用が見られない人称表現は、それだけ読み手に対し、

普通は使うものではない特別な用法であるという「隠れたカリキュラム」となり得る。女性のための人称表現は、明治時代に国語が制定される過程で考慮されることなく、女性が男性と同様の人称表現を使うことが排撃されてきた経緯がある（中村，2021）。現代においても尾を引くこの問題は、女性が自分を表現するための手段が制限、抑制されているという点で、日本語におけるジェンダー・ギャップと言えるだろう。

研究課題4では、登場人物の描かれ方に性役割が見られるかどうかを検討した。その結果、72編中、性別役割分業、および女らしさを描いた教材が、それぞれ13編、11編含まれることがわかった。こういった描写は、特定の仕事や行為が、本来性別を限る必要はないにも関わらず、「男性／女性は～する／しないものだ」という性役割の意識を助長することになり得る。一方で、そのようなステレオタイプを打破し得る「ジェンダーを超える女性」が描かれている教材も10編見られた。この内9編が女性著者によるものであったことから、同じ性の登場人物でも、著者がその人物と同性か異性かによって描かれ方が異なる可能性が考えられる。それはすなわち、著者の抱くジェンダー像が登場人物に反映されている可能性を示唆するものでもある。そのため、教材のジェンダーを分析する際は、主要な登場人物の性別だけでなく、その描かれ方にも注目する必要があるだろう。さらに、「ジェンダーを超える女性」が描かれている教材を含む教科書かどうかという点は、出版社によっても差のあることがわかった。掲載教材におけるジェンダーの描かれ方が出版社によって異なるのであれば、これは教科書を選定する際の一つの指標とされてもよいだろう。

以上のことから、高校国語教科書は、ジェンダー・バイアスを助長し得る要素を多分に含むと結論づけられる。著者および主要な登場人物の性別の偏りは小学校国語教科書ほどではなく、女性のステレオタイプを打破するような女性の描写も見られるとはいえ、全体としては、牛山（2014）、永田（2012）の結論と同様に、「男性中心」であり、「性別役割規範」による「隠れたカリキュラム」が存在すると言える。無論、物語教材はそれが書かれた年代や、作品内の時代設定を考慮すれば、著者の男女比や登場人物の性別および描かれ方に、ある程度の偏りが生じることはやむを得ない。人称表現のように、長い年月をかけなければ変わりようがないものもある。しかし、目的とされるべきは、教科書における男女不平等の描写をなくしていくことそれ自体ではなく、生徒がジェンダー・バイアスをもつことなく、社会に存在するジェンダー・ギャップに立ち向かい、これを解消していく力を養うことである。そのため、教科書にジェンダー・バイアスを助長し得る要素が見られるなら、授業ではこの事実を生徒に着目させ、批判的に検討させる機会を設けることが重要であろう。高校生であれば、本格的にジェンダーの問題を、自身の問題かつ社会全体の問題として捉えることもできるはずである。その際に教師は、教科書教材のどのような側面が、ジェンダー・バイアスを助長させる「隠れたカリキュラム」として機能し得るかを把握しておく必要がある。このような場合に有益な情報を提供できるという点で、本研究から得られた知見は意義をもつ。

6. おわりに

本研究では、ジェンダーから見た高校国語教科書の実態を明らかにすることを目的に、高校国語教科書21冊に掲載されている物語教材72編を分析した。著者および主要な登場人物の男女比、登場人物が用いる人称表現、登場人物の描かれ方という観点から分析を行った結果、ジェンダー・バイアスを助長し得る要素の見られることが明らかになった。一方で、ある程度のジェンダー上の偏りはやむを得ないものでもあるため、教師は生徒に対し、あえてそのような点に着目させ、ジェンダーに関して批判的に検討させる機会をもつ必要のあることを主張した。

従来、小学校、中学校の教科書に比べ、ジェンダーから見た高校国語教科書の実態はほとんど明らかになっていなかった。本研究では、さまざまな観点から、その実態を明らかにすることができたが、男性に焦点を当てた分析はできなかった。特に性役割については、女性だけでなく男性の描かれ方にも、多分にステレオタイプの含まれることが考えられる。今後の課題としたい。

参考文献

- 愛知県教育委員会 (2020) 「令和2年度使用県立高等学校教科用図書の採択結果」
 <<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/310863.pdf>> (2021年9月22日閲覧)
- 天野正子 (1988) 「性(ジェンダー)と教育の課題—かくされた『領域』の持続—」
 『社会学評論』39(3): 266-283.
- 伊藤良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子 (編) (1991) 『教科書の中の男女差別』
 明石書店
- 上野千鶴子 (2006) 「ジェンダー概念の意義と効果」『学術の動向』11: 28-34.
- 牛山恵 (2014) 『ジェンダーと言葉の教育—男の子・女の子の枠組みを超えて—』
 国土社
- 加藤秀一 (2006) 『知らないと恥ずかしいジェンダー入門』朝日新聞出版
- 河野銀子・藤田由美子 (編) (2018) 『新版 教育社会とジェンダー』学文社
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 小宮明彦 (2011) 「国語教科書の中の異性愛主義—『目に見える制度』の中の『目に見えない制度』—」『ことば』32: 32-54.
- 静岡教科書株式会社 (2020) 「令和2年度教科書採択一覧表」
 <<http://www.shizukyo.co.jp/data/syoten/saitaku%20itiranhyo/%E4%BB%A4%E5%92%8C2%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E6%95%99%E7%A7%91%E6%9B%B8%E6%8E%A1%E6%8A%9E%E4%B8%80%E8%A6%A7%E8%A1%A8.pdf>>
 (2021年9月25日閲覧)
- 武田憲幸 (2003) 「高等学校の国語教科書にみられるジェンダー問題」『日本ジェンダー研究』6: 13-26.
- 東京都教育委員会 (2020) 「令和2年度使用都立高等学校及び都立中等教育学校(後

期課程)用教科書 教科別採択結果(教科書別学校数)」

<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/textbook/adoption_policy_other/adoption_result/files/result_textbook_hs/result.pdf> (2021年 9月22日閲覧)

内閣府男女共同参画局(1999)「男女共同参画社会基本法」

<https://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html#anc_chapter1> (2021年 9月25日閲覧)

中村桃子(2021)『「自分らしさ」と日本語」ちくまプリマー新書

永田麻詠(2012)「小学校国語教科書に見るカリキュラムの考察—ジェンダーおよびクィアの観点から—」『国語教育思想研究』4: 37-41.

日本経済新聞(2020)「21年度からの中学教科書 「性の多様性」理解促進に工夫」(3月25日付)

<<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO57196990V20C20A3CR0000/>> (2021年 9月23日閲覧)

松元敬子(2005)「ジェンダーからみた中学国語教科書—教科書が伝える男女観と未来像—」『日本語ジェンダー学会誌』5: 1-10.

宮崎あゆみ(2016)「日本の中学生のジェンダー—人稱を巡るメタ語用的解釈—変容するジェンダー言語イデオロギー—」『社会言語科学』19(1): 135-150.

森繁男(1992)「『ジェンダーと教育』研究の推移と現状—『女性』から『ジェンダー』へ—」『教育社会学研究』50: 164-183.

Butler, J. P. (1990). *Gender Trouble: Feminism and the subversion of identity*. Routledge. (竹村和子 [訳] 1999 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)

Stoller, R. J. (1968). *Sex and Gender: The development of masculinity and femininity*. Jason Aronson Publishers. (桑畑勇吉 [訳] 1973 『性と性別—男らしさと女らしさの発達について—』岩崎学術出版社)

出典

【高校国語教科書】(21冊)

改訂版 新訂国語総合 現代文編/改訂版 国語総合/改訂版 標準国語総合/改訂版 新編国語総合/改訂版 新編現代文 A/改訂版 現代文/改訂版 標準現代文 B(以上, 第一学習社), 国語総合 改訂版 現代文編/精選 国語総合 新訂版/新編 国語総合 改訂版/現代文 A 改訂版/現代文 B 改訂版 上巻/現代文 B 改訂版 下巻(以上, 大修館書店), 精選 現代文 B 新訂版/新編 現代文 B 改訂版/国語総合 現代文編/精選 国語総合/新編 国語総合/現代文 A/精選 現代文 B/新編 現代文 B(以上, 東京書籍)

【物語教材】(72編)

相棒(内海隆一郎)／青が消える(Losing Blue)(村上春樹)／赤い繭(安部公房)／空き缶(林京子)／伊豆の踊り子(川端康成)／いろはに、こんぺいとう(原田マハ)／沖縄の手記から(田宮虎彦)／幼なじみたち(遠藤周作)／おぼろ月(藤沢周平)／鏡(村上春樹)／鞆(安部公房)／神様(川上弘美)／枯野抄(芥川龍之介)／カンガルー日和(村上春樹)／城の崎にて(志賀直哉)／巨人の接待(小川洋子)／コート(梨木香歩)／こころ(夏目漱石)／子供たちの晩餐(江國香織)／骰子の七の目(恩田陸)／ざしきわらし(吉本ばなな)／山月記(中島敦)／山椒魚(井伏鱒二)／島の少年一船(内海隆一郎)／スペインタイルの家(木内昇)／清兵衛と瓢箪(志賀直哉)／セメント樽の中の手紙(葉山嘉樹)／卒業(魚住直子)／卒業ホームラン(重松清)／その夜のコンヤック(遠藤周作)／タオル(重松清)／高瀬舟(森鷗外)／たけくらべ(樋口一葉)／他人の夏(山川方夫)／旅する本(石田衣良)／旅する本(角田光代)／調律師のみ子さん(いしいしんじ)／デューク(江國香織)／友よ(林京子)／ドライ・クリーニング(吉田修一)／トランジット(小川洋子)／とんかつ(三浦哲郎)／ナイン(井上ひさし)／蠅(横光利一)／バグダッドの靴磨き(米原万里)／葉桜と魔笛(太宰治)／バスに乗って(重松清)／鼻(芥川龍之介)／離さない(川上弘美)／話を聞かせて(山本文緒)／美神(三島由紀夫)／ひよこの眼(山田詠美)／富嶽百景(太宰治)／藤野先生(魯迅)／ベル・エポック(絲山秋子)／ほおずきの花束(鷺沢萌)／星の王子様(サン・テグジュペリ)／鉄道員(浅田次郎)／ほねとたね(川上弘美)／舞姫(森鷗外)／真面目な二人(川上弘美)／待合室(内海隆一郎)／水かまきり(川上弘美)／みどりのゆび(吉本ばなな)／武蔵野(国木田独步)／指(鷺沢萌)／夢十夜(夏目漱石)／よだかの星(宮沢賢治)／羅生門(芥川龍之介)／蘭(竹内寛子)／良識派(安部公房)／檸檬(梶井基次郎)

付記

本稿は2021年に兵庫教育大学に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。

(いわたあゆみ 兵庫教育大学大学院・おかげさわたる 兵庫教育大学)